OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
2018・2・28
38

目次

2 旧吉田茂邸の再建経過について
3 旧吉田茂邸ミニパネル展関連企画講演会「旧吉田茂邸の建築と吉田五十八」
7 明治の記憶～知られざる英雄・後藤　潤　その２～

特集：旧吉田茂邸公開

旧吉田茂邸（再建後）

平成21年3月22日に原因不明の火災で焼失した旧吉田茂邸は、このたび、多くの方のご協力を得て再建することができ、平成29年4月1日から大磯町郷土資料館の別館として公開しています。この「資料館だより」では、旧吉田茂邸の公開にあたり、旧吉田茂邸特集として、再建から公開に至るまでの経緯と、平成29年11月11日に旧吉田茂邸において開催した講演会の講演録をお届けします。

旧吉田茂邸の再建経過について

昨年4月1日、旧吉田茂邸は再建工事及び館内の備品整備を終え開館しました。本稿を記載している平成29年12月28日の時点で、87,547人の観覧者数を集めています。当初の見込みを大いに上回る観覧者数であり、また、観覧された皆様から概ね好評を得ており、再建に係わった者として、感慨ひとしおです。

さて、旧吉田茂邸は「再建着工・御礼と報告の会」、「落成記念式典」の冒頭に述べられた町長ほか町関係者からの言葉のとおり、多くの方々のご尽力、ご協力、また、多くの寄附によって再建できたものです。再建に係わった職員もその都度、課題に直面し、解決し、実現に至っています。筆者も再建の意義を具現化できるのか不安を抱えて、事務を進めてきました。本稿の記載にあたって、再建事業を振り返る中、更なるサービスの向上を目指し、運営を進めていきたいと考えています。以下、再建事業の経過について、概略を記します。

旧吉田茂邸　既存施設の保存、活用について

本事業は平成17年4月に、所有者から神奈川県に対して、国や県等公的機関での買い取りの要望が提案されたことが始点となっています。本要望に関係して、神奈川県知事と大磯町長の連名で、内閣官房長官宛に国による整備・活用の要望書を提出します。要望書提出後の町内の動きとしては、大磯町主催で旧吉田茂邸の見学会を開催するとともに、大磯町議会、区長連絡協議会、大磯町商工会が主体となり、署名運動を実施します。結果として見学会には、7,332人が来場、署名運動については、51,868人の署名を集めます。なお、先述の要望書に対し、平成18年8月に内閣官房から、国主導での整備は困難とする回答があり、翌月、神奈川県は都市公園として隣接する県立大磯城山公園と一体整備の方針を固めます。公園整備を具現化すべく神奈川県に旧吉田茂邸公園整備計画検討委員会、大磯町議会に旧吉田茂邸保存活用特別委員会、大磯町に旧吉田茂邸活用検討会議が設置されます。各会議で保存、利活用について協議が進められる最中の平成21年3月22日、原因不明の出火により旧吉田茂邸は温室のみを残して焼失します。

旧吉田茂邸の再建について

焼失後まもなくして、神奈川県に旧吉田茂邸再建検討委員会が設置され、公園整備計画に基づく旧吉田茂邸再建計画を、専門的見地から検討します。大磯町には、関係する部署の部課長、並びに有識者で構成される旧吉田茂邸再建プロジェクト、大磯町議会に旧吉田茂邸再建特別委員会が設置されます。また、平成23年4月には、町民、有識者から構成される旧吉田茂邸再建検討委員会が設置され、再建に向けた具体的な方策について協議を進めます。こうした会議では主として、再建に係わる費用の負担や運営方針のほか、再建コンセプト、復元レベルなど再建工事に向けた方針が議論されました。

また、再建工事の資金調達のため、平成21年7月に大磯町旧吉田茂邸再建基金を設置し、募金活動を開始します。平成23年6月には、財団法人吉田茂国際基金より多額の寄附を受け、再建事業は加速する結果となりました。

平成24年7月、神奈川県と大磯町の間で、旧吉田茂邸再建の基本事項に関して基本協定を締結。本協定では、神奈川県は再建事業に係る技術支援を、大磯町は再建事業に係る全額の費用負担を担うことで、合意します。本協定に基づき神奈川県の発注により平成24年度に基本設計業務を、平成25年度に実施設計業務を実施し、平成26年12月から18ヶ月をかけて再建工事を実施。平成28年5月、ついに建物本体が完成に至ります。

再建工事を進める一方、再建検討委員会から大磯町長に提出された提言書の運営指針に基づき、大磯町の関係部署の部課長で構成する旧吉田茂邸再建検討会議で、運営方法や調度品整備計画の調整が進められました。

完成後は検査を経て、平成28年6月に神奈川県から大磯町に建物の引継ぎが行われ、開館までの9ヶ月間をかけ、館内の調度品、備品整備を行いました。

（当館学芸員／北水慶一）

旧吉田茂邸ミニパネル展関連企画講演会

旧吉田茂邸の建築と吉田五十八

旧吉田茂邸では平成29年9月2日から平成30年3月31日までを会期として、「旧吉田茂邸の建築」と題したミニパネル展を開催しました。この展示の関連企画として平成29年11月11日に開催しました、講演会「旧吉田茂邸の建築と吉田五十八」の講演抄録を掲載いたします。

旧吉田茂邸は兜門を入って、池の前から見上げる場所が唯一のビューポイントとなっており、ここから見上げると、温室・食堂・玄関、加えて奥の屋根越しに新館が見えます。これは、全て吉田五十八が設計した建物で、それ以外の建物は位置や植栽の関係で見ることができません。つまり、吉田邸の外観はほぼ吉田五十八の手によるものといえます。本講演会では、この吉田五十八という、近代の日本建築史において、ひとつの新しいスタイルを作り出した建築家を取り上げています。この講演抄録が、旧吉田茂邸の建築について理解を深めるための一助となれば幸いです。

講師：

板垣元彬氏プロフィール

東京藝術大学美術学部建築科卒業。1963年より吉田五十八研究室に勤務したのち、1977年に板垣元彬建築事務所を開設。2001年～2007年まで東京藝術大学美術学部建築科非常勤講師。

①吉田五十八について

吉田五十八は明治27年、東京日本橋の生まれです。父親は太田胃散の創業者である太田信義で、彼が58歳の時の子供でしたので「五十八」と名づけられました。15歳頃、母方の家に跡を継ぐ者がいなかった為吉田姓を名乗るようになりますが、実際の生活は太田家で、太田家の人間として育てられます。大正4年、21歳の時に東京美術学校図案科2部に入学します。当時美校では図案科2部で建築教育を行っていました。在学中に健康を損ね、卒業したのは大正12年です。卒業後就職はせず、自宅で設計事務所を開きました。

彼の学生時代、美校の教育はヨーロッパの古典的な様式の建築デザインの習得が重視されていました。その頃ヨーロッパでは、産業革命後の技術の発展に刺激され、新しい芸術運動が展開されていました。それらは少し遅れて日本にも伝わり、若い建築家や学生に大きな影響を与えました。学生だった吉田五十八もドイツやオランダの新しい建築に夢中になります。大正14年、憧れていたヨーロッパの新しい建築を実際に見てみたいとの思いから、ヨーロッパとアメリカへの遊学の旅に出発します。

最初はオランダで、デ・クラーク設計の集合住宅の団地を見ますが、日本で考えていたものとは違いその粗雑さに幻滅を感じます。次にドイツのベルリンでH・ペルツイッヒ設計の大劇場の安っぽさに失望し、その後ハンブルグで見たF・ヘーガーのチレハウスではやや納得します。次にダルムシュタットでオルブリッヒ設計の結婚記念塔を見て、これでやっと遥々ドイツまで来た甲斐があったと納得したそうです。その後イタリアに入ります。そしてフィレンツエで見た初期ルネッサンスの建築のおおらかさ、格調の高さ、圧倒されるようなボリュウームに言いようのない感銘に打たれたと語っています。その後欧州各地でこのようなショックを受ける事はなかったが、各地で見たゴシック建築には石造建築の魅力に打ちのめされたと語っています。結局、吉田五十八の建築観に大きな影響を与えたのはドイツやオランダの新しい建築ではなく、初期ルネッサンスの建築と中世のゴシック建築でした。これらの建築は一人の人間の知恵や能力だけで作られるものではなく、その土地の歴史、伝統、文化、民族性、血統などに根差しているものであると考えるようになります。それは日本の建築についても言える事で、日本の伝統的建築も日本人でなければ出来ないものである。とは言え伝統的な建築の踏襲だけでは意味がない、吉田五十八が求めていたのは近代的な建築です。日本の伝統的建築の中で現在の日本人の生活に適応できる

可能性がある建築は何であろうと考えて、数寄屋建築にその可能性があると考えたのです。そして、大正15年に帰国して事務所を再開して、数寄屋建築の近代化に取り組むことになります。

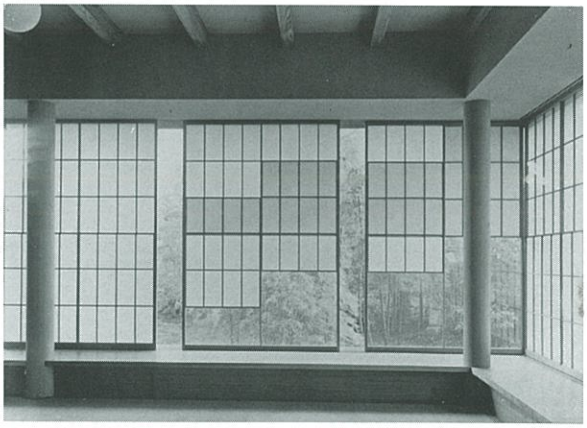
②書院造と数寄屋造　伝統的な日本建築

ここで数寄屋建築について説明するにあたり、対照的な性格の書院建築を引き合いに出して話をしたいと思います。書院建築、数寄屋建築それぞれ3つの例を挙げます。最初は銀閣寺として知られる慈照寺の足利義政の持仏堂兼書斎、東求堂の中の同仁斎と言う四畳半です。付書院とその左にある違い棚だけのまさに書院座敷の最小単位のような部屋です。次は大津にある園城寺の光浄院客殿の上座間です。正面の押し板（床の間の前身）の右に違い棚が、押し板の左には、2畳の上段の間がありそこに付書院が在ります。最後は醍醐寺の三宝院の表書院です。正面の床の間の左に違い棚、右側に付書院があります。ご覧のように書院建築は格式の高さが求められた上層階級の建築です。次は数寄屋建築です。最初は有名な桂離宮の庭の中にある松琴亭と呼ばれる茶屋建築です。一見、田舎家のように見えますが、洗練された建築であることが分かります。次は京都にある曼殊院と言う寺の書院です。床の間と上段の間、その右側の付書院はオーソッドクスな書院建築のようですが、床柱とでも言うべき中央の柱は丸太です。更に左側の厨子を組み込んだ棚の意匠は複雑な構成ではあるが巧妙で面白いものです。全体に遊び心が感じられるデザインです。書院風数寄屋と呼ばれる建築です。このように、数寄屋建築は材料の選択やデザインにおいて制約の少ない自由度の高い建築です。それに対して書院建築は一定の規範があるという違いがあります。お示ししている絵は江戸時代の庶民の暮らしぶりを描いた浮世絵ですが、その背景に見られるのは数寄屋建築と呼んでいいものです。このように数寄屋建築は、上は天皇や貴族、武士階級から下は町人の世界にまで広まっていたことが分かります。吉田五十八が数寄屋に近代化の可能性を見出したのは当然の事だと思います。

③前期　明朗な数寄屋の追及

ここからは、吉田五十八の建築についてお話します。彼は昭和10年に女性向けの雑誌に数寄屋の近代化の手法についての記事を書いています。それは従来の和風住宅の線の多さを指摘して、それを整理すべきだと言う彼の日頃の主張を和服と洋服の違いを引き合いに出して書いた記事です。すなわち和装の七紐と言うように、着物では腰紐や帯、帯締めなど紐が多くて、世界的にも最も複雑な衣服であろう。それに比べると洋服のワンピースは腰のベルト一本で留めている。着物は洋装に比べ明朗性に欠けると言える。同じ様に日本の住宅建築も長押や地袋、違い棚、天井廻縁、棹縁など非常に線が多い。これらをどうにかしないと明朗な家にならない。和風の住宅もワンピースの明朗性に倣わらなければいけない。と言う様な趣旨の文章で簡潔なデザインの必要性を説いています。

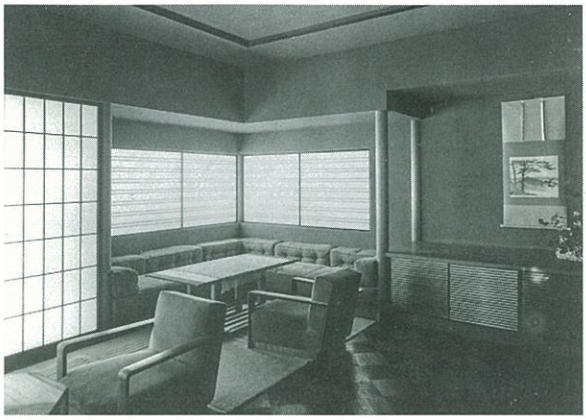
小林古径画室（東京都大田区、昭和9年）



①小林古径記念美術館（新潟県上越市）として現存。

数寄屋の近代化、明朗なデザイン、大壁式、線の整理などの特徴がこの建築にも見られます。一例として窓の障子の上に鴨居が見当たりません。小壁をそのまま塗り回した落ち天井の中に鴨居を塗りこんでいます。これだけでも随分様子が違って見えます。面白いのが障子のデザインです。これは良くある雪見障子の手法を応用したものですが、すりあげ障子を障子の真ん中の竪桟で左右2枚に分けています。これで雪見障子を色々なパターンに動かして画室の明るさを調節する工夫です。

吉屋信子邸（東京都新宿区、昭和 11 年）



②現存せず。

この頃、吉田五十八は建築界では既に注目を集めていましたが、彼が世間一般に広く知られる様になったのは昭和 11 年に設計した吉屋信子邸が雑誌や新聞紙上に広く発表されてからです。施主が著名な小説家であったことも影響したのでしょう。吉屋邸は洋間が多く、和室は一部屋しかありません。ほとんど和室がない数寄屋だったのです。写真の応接間は、柱が小壁より上は大壁の中に塗り込められています。その為に小壁は柱に区切られことなく横に伸びやかな面として展開します。それから荒組の障子やソファ背後の横桟の障子も吉田五十八の特徴的なデザインです。このような彼の和風住宅の作風がはっきり確立されるのは昭和 15 年頃です。

料亭新喜楽 寿の間（東京都中央区、昭和 15 年）

新喜楽の寿の間は柱、長押、天井の棹縁が杉の削り丸太です。柔らかさと強さを兼ね備えた伸びやかな感じのデザインの座敷です。床脇の鍵の手の地袋と横長の障子は書院建築の地袋と書院窓を独自の解釈で再構成して、床の間と一体に組み立て直しています。吉田五十八の床の間のデザインの典型ともいえるものです。

岩波別邸（静岡県熱海市、昭和 16 年）

吉田五十八はよく引き込み式の建具を採用します。この家も外部に面する建具は、女中室と台所以外は全て引き込み式になっています。開口部がフルオープンになるのです。そうしたくなる程見晴らしが良い場所にこの別荘は建てられています。建具を引き込み式にすると開口部と壁面のバランスには相当な制約を受けますが、この家では巧みな平面計画でそのような制約がある事を感じさせません。

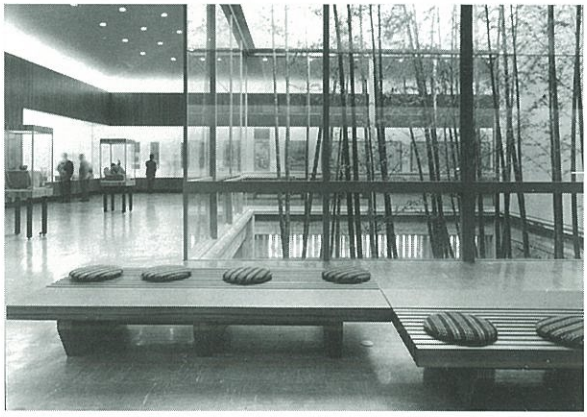
④中期　数寄屋の広がり

戦前は、吉田五十八の手がけた公共建築はあまり多くありませんが、戦後には公共建築も多くなってきます。

日本芸術院会館（東京都台東区、昭和 33 年）

四方を建物で囲んで大きな中庭を作っています。大磯の吉田茂邸もそうですが、吉田五十八は好んで中庭を取り込んだ設計をしています。ここでは伝統的な勾配屋根は採用していませんが、軒は大きく張り出しています。軒先は伝統的な日本建築の軒先のデザインを思わせる形状です。吉田五十八は折々に平安時代の日本の文化に共感を示しています。そんな気持ちがこの建物の設計に反映されているようです。

大和文華館（奈良県奈良市、昭和 36 年）



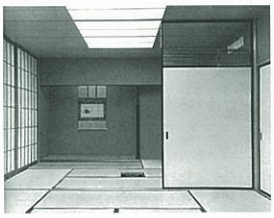
③内観は 2010 年のリニューアル前のもの。

これはこの美術館の展示室の写真です。展示室の中央に大きな中庭を作り竹が植えられています。当時は美術館の展示室が外部に開かれているというのは非常に珍しいもので斬新なデザインでした。とても気持ちが良い展示室です。

北村邸（京都府京都市、昭和 38 年）

これは鉄筋コンクリート造の住宅です。この部屋の角には柱がありません。コンクリートの柱はどうしても一定の太さが必要になります。室内から庭を見る時には邪魔になるので柱を立てなくても良いように構造計画をしています。この家の特長は、座敷と次の間の障子は欄間を省いて天井までの障子になっていること。座敷と次の間の間仕切りの襖も天

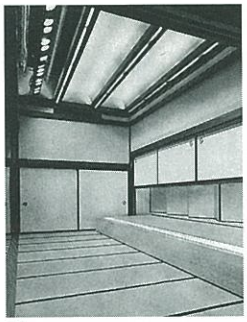
井までの襖です。但し襖の上部はあたかも欄間のように吹き抜けになっています。誠に大胆なデザインです。そして座敷には炉が切られています。茶室として利用されるこ



④

ともあるのです。この座敷は吉田五十八の美意識が所謂茶室の侘び、さび、とは別種のものであることを示しています。

料亭岡崎つる家（京都府京都市、昭和 39 年）



⑤

大阪の料亭つる家の京都の店です。玄関の正面の壁に大きな下地窓が二つ切られています。下地窓は数寄屋建築には好んで用いられます。その場合普通は葦や竹などが用いられますが、ここでは着色されたアルミパイプが用いられています。近代的なデザインの建築の中だから近代的素材が違和感なく納まるのだと思います。

次は 2 階の書院風大広間です。次の間の奥の襖がせり上がり、その奥から金屏風を乗せた舞台がせりだしてきます。同時に天井には舞台用の照明が現れます。びっくりする様な仕掛けですが、吉田五十八は戦後、歌舞伎座、明治座の復興の為の設計や新橋演舞場の増改築の設計を手がけています。劇場の舞台の機構には精通していました。その知識と経験を生かした仕掛けです。

⑤後期　伝統様式の新たな挑戦

最後は昭和 40 年から 49 年に亡くなるまでの作品についてです。後期にはもちろん住宅もありますが、特に目を引くのが仏教寺院の仕事が加わることです。

中宮寺本堂（奈良県斑鳩町、昭和 43 年）

⑥

中宮寺本堂は正面 22 尺、奥行き 44 尺の小さなお堂です。この中に外陣と内陣が収まっています。外陣の回り 3 方を独立柱で囲い、この外部空間を含めて屋根をかけています。この写真では分かりませんが、このお堂は半分位が池の上に張り出しています。本堂の脇に小さな消火用のポンプ小屋があります。火事の場合ポンプで池の水を使って消火するようになっています。このお堂は内外ともに装飾的な要素はほとんどない簡素な寺院建築です。

成田山新勝寺本堂（千葉県成田市、昭和 43 年）

この本堂は正面から見ると本堂の左右に翼殿を従えた特徴的な構成になっています。大本堂は成田山の檀信徒の信仰を支えるこの寺の象徴です。伝統的な寺院建築には、軒裏に組み物と呼ばれる軒を支える仕組みがあります。この本堂の場合、組み物に替えて出桁とでも言うべきものが設けられて、伝統的なイメージを色濃く引き継いでいます。内外ともに華やかなデザインの寺院建築です。

吉田五十八は数寄屋建築の近代化を手始めとして、伝統的な建築の近代化、さらには新しい機能が求められる近代的な建築においても、日本的な表現を追求し続けました。そして昭和 49 年 79 歳で世を去りました。

写真出典

①、②東京藝術大学所蔵
③多比良敏雄氏撮影、東京藝術大学所蔵
④多比良敏雄氏撮影、『数寄屋造りの詳細　吉田五十八研究』（建築資料研究社、1985）より
⑤多比良敏雄氏撮影、『新建築』1965 年 8 月号（新建築社）より
⑥平宏明氏撮影

（編集：当館学芸員／久保庭萌）

明治の記憶
～知られざる英雄・後藤　潤　その２～

はじめに

明治の初めに、現在の大磯町から移民の先駆けとしてハワイに渡った、後藤潤（ごとうかつ）という人物がいた。後藤は23才のとき、明治18（1885）年に政府が斡旋したハワイ王国官約移民の第一回船で渡航し、サトウキビ農場での労働を経て、3年後には雑貨店を開くまでに成功した。後藤は、過酷な労働条件に苦しむ労働者たちを身を挺して支援したことで知られ、ハワイ島のホノカアには後藤潤の記念碑が建てられている（文献1、文献4）。

大磯町における後藤の足跡を探る筆者らの試みは2004年に遡る（堀が調査を開始）が、2015年6月29日に、筆者らと共同研究者（ハワイ大学／Patsy Y. Iwasaki）の4名は、後藤の縁者である小早川徹氏の協力により、ハワイ王国で没した後藤の墓碑（大磯墓碑）に大磯町内で遭遇した（文献1、文献2）。2017年2月には筆者らの一人（佐川）が墓碑銘文の拓本を採取した。本稿ではその内容を記録して考察する。

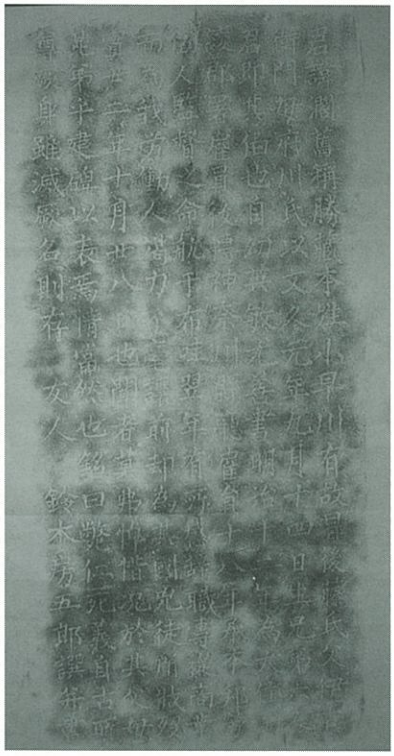
墓碑の文字

【正面】
小早川潤墓
【左側面】
明治二十四年一月十五日
建父　小早川伊右衛門
友人　伊達時書
【裏面】
銘文177文字
友人　鈴木房五郎譔弁書

墓碑銘文の拓本とその判読

採取した拓本には以下のとおり記されている。

「君諱潤舊稱勝蔵本姓小早川有故冒後藤氏父伊右／衛門母府川氏以文久元年九月十四日生兄弟六人／君即其伯也自幼英敏尤善書明治十二年為大住淘／綾郡署雇員後轉神奈川縣廳雇員十八年承本邦勞／働人監督之命航于布哇翌年有所感辞職専從商業／而為我労働人竭力不毫



譲前却為其國兇徒所戕歿／實廿二年十月廿八日也聞者莫弗悼惜況於其父母／昆弟乎建碑以表焉情當然也銘曰斃仁死義自古所／尊厥身雖滅厥名則存　友人　鈴木房五郎譔弁書」

墓碑銘文の解釈

拓本の解釈を以下に記述する。

「君の名前は潤、旧称は勝蔵、本姓は小早川であるが故あって後藤氏を名乗る。伊右衛門を父に府川氏を母に文久元年九月十四日に生まれた。兄弟は六人で君は長男だった。幼いころから英敏で、はなはだ書を善くした。明治十二年に大住淘綾郡署の雇員となり、後に神奈川県庁の雇員に転じた。明治十八年に本邦労働人の監督の命を承って布哇に渡った。翌年、感ずる所あり職を辞して専ら商業に従った。我が労働人のため最善を尽くし少しも譲らなかったため、却って其の国の兇徒により戕歿される所となった。実に明治二十二年十月二十八日のことであった。聞いて悼惜しない者はいない。まして父母兄弟に於いてはなおさらである。ここに碑を建て、その思いを表すこととなった。まことにその気もちは理解できる。仁を貫いて倒れ、義を貫いて命を落とす。これは昔から最も人の尊んできた人の生き方である。潤氏の肉体は滅んだが、氏の名が朽ちることはない。友人　鈴木房五郎」

ホノカア記念碑の碑文

ハワイ島ホノカアに1994年に建った後藤濶の記念碑（ホノカア記念碑）の碑文を、筆者らの一人（堀）の論文より引用して以下に掲載する（文献4）。

「「日本人商店主　後藤濶氏は、早朝6時に、ホノカア留置所から約100ヤードの電柱に吊るされて死亡しているのが発見された…。」『デイリー・パシフィック・コマーシャル・アドバタイザー』1889年10月29日

ハワイに渡る前に英語を習得する先見の明があり、語学力を駆使して砂糖業労働者のために、人間としての尊厳と公正な労働条件を達成しようとした。多くの人々は彼をパイオニア的な労働界の指導者とみている。彼の精神の永遠ならんことを…。

1994年12月10日　後藤濶記念碑委員会　委員長ジツオ・コタケ」

考察

後藤の墓はハワイ島ホノカアのハマクア浄土院が管理する墓地に存在する。大磯墓碑は後藤の実父である小早川伊右衛門が、濶が1889年にハワイ王国で殺害された1年後の明治24（1891）年1月15日に、記念碑として建立したものと考えられる。

墓碑銘文は鈴木房五郎の撰文、伊達時の揮毫によるとある。鈴木と伊達は、往時の大住・淘綾郡の郡長で、郡役所の雇員であった小早川勝蔵（後藤濶）の上司であった山口左七郎とともに、1880年代の初めに勃興した神奈川県の自由民権運動に深く関わった（文献3）。大磯墓碑は彼らと後藤の親交を示唆する。

ホノカア記念碑の碑文は、20世紀末のホノカア、ハワイ、さらには米国の社会の動きを反映しながら、様々な観点からの議論を経て決定された（文献4）。

大磯墓碑と、それから100年以上の時を経て建てられたホノカア記念碑の碑文に、共鳴する部分が窺われることは興味深い。両碑ともに、未来を信じて力いっぱい歩み、かつ、人々の尊厳を、命を懸けて求めた一人の青年を顕彰し、彼の精神が生き続ける社会を願う心が刻まれた、と言えよう。

謝辞

大磯墓碑銘文の判読・解釈に際して、高木（北山）眞理子氏（愛知学院大学教授）、後藤致人氏（愛知学院大学教授）、加藤敏郎氏（大磯町在住）にご協力いただきました。また、川邉絢一郎氏（大磯町郷土資料館学芸員）には墓碑拓本についてご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

参考・引用文献

文献1　佐川和裕「明治の記憶～知られざる英雄・後藤濶～」『Report 大磯町郷土資料館だより』第36号7頁2016年

文献2　加藤喜規「神奈川県に残された後藤濶の足跡－墓碑をめぐって」日本移民学会第26回年次大会ラウンドテーブルC会場、2016年；『日本移民学会Newsletter』第73巻9頁2016年

文献3　大磯町編集発行『大磯町史3資料編近現代（1）』135頁1998年

文献4　堀江里香「後藤濶リンチ事件と記念碑－ハワイ日系社会黎明期の記憶の表象－」『アメリカ研究』第47号185頁2013年

（大磯町在住／加藤喜規）
（テキサス大学／堀江里香）
（当館前館長／佐川和裕）

Report　－大磯町郷土資料館だより－　No. 38
平成30(2018)年2月28日発行

編集・発行　大磯町郷土資料館
〒255-0005　神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
TEL. 0463(61)4700 ／ FAX. 0463(61)4660